

「三冠王を育てた 「見ているだけ」のコーチング

私が考えるコーチングについて書いていく前に、まず私自身が初めて体験したコーチングの話から書いてみよう。

1979年にドラフト3位でロッテへ入団した私は、社会人出身ということもあって、一応レギュラー予備軍としてスタートすることになった。だが、春季キャンプ早々に打撃練習をしていると、ケージの後ろで山内一弘監督が金田正一さんと話している声が聞こえた。

「あの打ち方じゃあ（落合は）ダメだろう」と金田さん。

「そうだね」と山内監督も答える。

この会話を耳にした私は、「何でダメな選手をドラフトで指名するんだ」と少々憤りを感じながらも、「それならば、自分のやり方で最後までやってみよう」と決意した。

その後、山内監督から直々に打撃指導を受ける機会があった。山内さんは現役時代に多くの打撃タイトルを手にし、指導者に転じてからも卓越した打撃理論で選手の指導にあたってきた。教え始めると時間を忘れて徹底的にやることから、「やめられない、止まらない」の「カッパえびせん」というニックネームまでつけられた情熱的な人だ。

山内さんは、私にも様々なたとえを使って丁寧な指導をしてくれた。ホースで水撒きをする時の腕の使い方から、洗顔をする際の水のすくい方まで。実に細やかな指導であったが、私はそのすべての話を聞いた上で「俺のことはほっておいてください」と言ってしまった。振り返れば無謀な言動だったが、それ以降、山内監督は私に対して何も言わなくなった。

その結果、自分のスイングを自分自身で作り上げることになってしまった私は、先輩の中からお手本にできるスイングをしている人を探した。やがて、土肥健二さんという3歳上の先輩のスイングを参考にしながら、自分の打撃フォームを作っていった。

土肥さんのスイングを真似た私は、2年間は一軍と二軍を行ったり来たり状態を続けていたが、3年目に何とか一軍定着を果たすと、オールスター戦出場、首位打者獲得と、ようやくプロ野球選手らしくなることができた。

首位打者争いをしている頃に、自分のスイングについて考えた私は、実は山内さんの指

導が生きていることに気づかされた。私は内角に投げ込まれるボールへの対処がうまいと評価されていたが、この打ち方は、現役時代に『シュート打ちの名人』と呼ばれた山内さんの専売特許なのである。つまり、私は知らず知らずのうちに山内さんのスイングを習得していたのだ。

さらに、シーズンが終盤に差しかかると、何とか私に首位打者を獲らせようと、いろいろなサポートをしてくれた。ライバルの打者がいるチームと対戦する時には、「あいつには絶対に打たせるな」と投手に八ツパをかけた。一方、私の調子が良くない時は交代や休養をさせ、少しでも良い状態で打席に立てるようにしてくれた。こうした配慮は、自らも熾烈なタイトル争いを経験し、その中を勝ち抜いてきた指導者にしかできないものだろう。山内さんの指導は的を射ていた。だが、ルーキーだった私が、その指導法を理解することができなかったのだ。それでも強制的に教え続けずに、ほうっておいてくれた（じっと見ていてくれたと表現したほうがいいか？）こと、そして私が這い上がってきた時に最高のサポートをしてくれたことを、山内さんに深く感謝した。

山内さんは、私が首位打者を獲得した81年限りでロッテ監督の座を退かれたが、翌82年に私が史上最年少となる28歳で三冠王を手にする、その祝賀会にも足を運んでくださった。その時にかげられた

「やつぱり、おまえはいいバッターだったな。それにしても、三冠王になるとは想像できなかった」

という言葉は今でも忘れられない。

その後、ロツテでは西村徳文（現・千葉ロッテ外野守備・走塁コーチ）という俊足の内野手が台頭してきた。西村には山内さんの指導法が合うのではないかと考えた私は、西村を連れて山内さんのお宅を訪ねた。当時の西村には、ルーキーだった私よりも山内さんの指導を理解できる土台があるとも感じていたからだ。

すると、山内さんは私の時と同じように、口から泡を飛ばして西村に打撃指導をしてくれた。西村の打撃は、劇的ではないが少しずつ確実にレベルアップした。そして、私が中日へ移籍した後は主力となり、90年には打率3割3分8厘をマーク、ついに首位打者に輝いた。

高校、大学と満身に野球に取り組まず、社会人でも弱小チームでプレーした私にとって、本格的な指導を受けた最初の人である山内さんのことは、私自身が体験し、また後輩の成長を目の当たりにしたという点でも、若手に対するコーチングのいい手本だと感じている。

テレビのスポーツニュースをよく見る方ならご記憶かもしれないが、私は今春、横浜ベ

イスターズのキャンプに臨時コーチとして招かれた。現役を引退した後、臨時であれ『コーチ』という肩書をいただいて選手と接したのは初めての経験だった。3日間という実にわずかな時間であったが、私自身も「コーチングとは？」という基本的なテーマから、「良いコーチ、悪いコーチ」についてあらためて考える良い機会になった。

そんな経験をしてしばらくたった時、今回の出版の話が舞い込んだ。実に興味深い仕事だと思い、慣れないペンを走らせることにした。出版社は立派なタイトルをつけるが、こういう生き方、考え方をする人間もいるのだという参考書として読んでいただければ幸いだ。しかし、私の考えるコーチングは、少なくとも落合博満というエリートではない野球選手を一流に育て上げた実績はある。さらに、プロ野球界だけではなく、一般社会でも活用できるテーマを意識して書いたつもりだ。

上司や指導者といった立場にある方は「最近の若い者は……」と嘆く前に、また、これからの社会を生きていく若い人たちは「自分の人生をより実りあるものにしよう」という気持ちで、しばらくおつき合いいただければ幸いである。

二〇〇一年八月

落合博満